
月と夕日

夢喰ありな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と夕日

【Nコード】

N0584V

【作者名】

夢喰ありな

【あらすじ】

恋愛物。可笑しな性格の可笑しな感じのお話です。

(前書き)

恋愛物ですのでそれを承知で読みいただければ大丈夫です。

夕方は良い。いつもの世界なのにいつもとは違う何かを彷彿ほうふつとさせてくれる。可笑しい空間。それが私には上手くあてはまっていた。私自身がけっこうな可笑しい人間だからこの時間だけは私を認めてくれるそんな気がする。

いつものとおり学校の屋上からこの夕方という時間をボーっと空でも眺めながら過ごす。特に何をする訳でもなくこの心地いい時を過ごすだけ。

生徒が落ちないように張られた金網を掴むとガチャリと音がした。金網越しに見る夕日はとっても綺麗だった。

お日様もお月様も私を認めてはくれないけども今の時間のあなたは私を認めてくれるみたいだね。

「美月みつぎ…さん？」

誰かが私の名前を呼ぶ。夢心地から冷めてしまう。大切な時間を邪魔したその声に私は少しの苛立ちを覚えた。

「何？ 誰？」

イライラしながら振り返った先には同じクラスの男の子が立っていた。クラスメイトにそれほどまでに興味をもっていたわけでもないのに名前を思い出すことができない。誰だったかな…。

「え？ あ…ああ、俺、同じクラスありあけの有明 夕ゆうです。」

そうだ。確かにそんな名前だった。友達がさわやかでかっこいいとか騒いでた気がしないでもない。まあ、ほとんどろ覚えだが。

「私に何か用？」

「いや！えーと、何か、真剣にそっち見てたから。喋りかけないとすぐに消えちゃいそうな…！んーと、ごめん、別に何も用ないのしやべりかけちゃったみたい」

慌てながら弁解するような言い方。用も無いのに私に喋りかけてくるなんて変な奴。私はけっこうな変わり者だ。そんな私を見て非難するような人たちも少なくはないだろう。だけど私はそんなの気にしない。別に普通に生きてもつまらない。自分を飾って作った友達なんて無意味だからだ。

「あっそ。今、私取り込み中だから」

「ええ？そうだったの！？ごめん。邪魔しちゃったかな？」

「別に…」

しばらくの沈黙が続く。有明は私と同じように夕日を眺めだす。なんでこいつどっか行かないんだろう…。邪魔で仕方ない。

「…なんでそこにいるの？」

「え？なんとなく。美里さんが真剣に見てるから俺も一緒に見ようかなー。なんて。」

「そう、邪魔なんだけど？」

「え！俺、何か邪魔した！？」

ああ、もう、面倒くさい。なんとなくで少ないこの時間を私は邪魔されたくないのだ。

「そこに居る時点で邪魔」

「え？ ああ、ごめん」

そう言つて有明はそこをどく。やっと分かったか……。そう心の中で私は呟いた。ほっと安堵しながら残り少ないこの時間を私はまた満喫しようとした、が、しかし。

後ろのほうで金網の音がする。さっきの掴んだ音よりも大きい。何かがもたれかかった音。

嫌な予感とともに後ろを振り向くとそこには有明が金網にもたれかかりながらこっちを見ていた。後ろを振り向いた私と眼が合うとにっこりと笑顔を返してきた。

何故、そこに……。こいつは言葉の意味を上手く理解していないらしい。変な奴、あれくらいのことを言ったら誰でもこの場から立ち去った。居座る奴なんてこれまでにいなかった。

「貴方って可笑しいわ」

「美月さんには言われたくないな」

いや、私も相当変だというのは分かっているが、貴方も可笑しいところは確実にあると思う。

「ねえ、美月さん。ここで何してたの？」

「貴方には関係ない。」

立ち去るところかこいつはどんどん私に喋りかけてきた。こいつは何でここまで私に関わろうとしてくるのだろう。私と喋っていたって楽しいことはないだろう。

「えー。教えてくれたっていいのになー…」

有明はそう言って拗ねたような素振りをした。

「ぶふッ!!」

笑うつもりなんてさらさら無かったが何故だか可笑しくて噴き出してしまった。その様子を見て有明は満足そうに笑う。

「やっと笑った。俺が来てからずっと不機嫌そうな顔してたから安心した。あ…」

夕日が沈み始めた。この時間ともまた明日までさようなら。

「夕日きれいだったねー」

「そうね、私はもう帰るわ」

素っ気無く私はそう言った。屋上から出ようとして扉を開ける。すると後ろから有明の声がした。

「ねー! また明日来たらいるー?」

「…」

こいつって本当に変。でも可笑しな私が可笑しな夕日の時間に合うようにもしかしたら貴方と私も合うことができるのかもね。こいつももしかしたら夕日に誘われてきたのかな。

「ええ、そうね。居ると思うわ。」

さっきの言葉を聞いてかすかに微笑んだ自分が居るというのは否定できない。

（後書き）

短編小説二作目です。どうだったでしょうか？今回は女の子を主人公にしてみました。

ちなみにこの作品は連載にしようかと少し迷った作品です。もしかしたらふと思ったときに連載に発展させるかもしれないです。

この小説は自分ワールドを全開に出した。不思議ちゃんな感じになっけしまいましたね。

2時間弱で書いたので誤字、脱字があったらすいません！見つけ次第、訂正すると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0584v/>

月と夕日

2011年10月9日08時13分発行